

曹洞宗の大本山はふたつあり、一つは福井県にある大本山永平寺、もう一つは横浜鶴見の大本山總持寺です。その總持寺を開かれた方が瑩山禪師です。

瑩山禪師が示された教えをまとめた書物に、「伝」える「光」の記「録」と書く、『伝光録』があります。どのような書物かという、仏教を開かれたお釈迦さまから始まり、インドから中国へ禅を伝えた達磨大師さま、そして中国へ留学をされ、禅の教えを受け継いで帰国し、永平寺を開かれた道元禪師、第二代目孤雲懷奘禪師までの、五十三名の仏教の教えを伝えられた方々の伝記および解説書、注釈書にあたります。

『伝光録』は、石川県金沢市にある大乘寺にて、瑩山禪師が修行僧のために説かれた話を弟子達が記録したものです。当時の瑩山禪師の年齢は三十歳代前半といわれており、氣力に満ちた説法であったことがうかがわれます。また禪師は、中国で書かれた歴代の禅の教えの書物を多数読まれ、そこから引用などされながら、説法に望んだことが分かっております。

先輩僧侶達の心の持ち方を、瑩山禪師の言葉で「修行とは…、坐禅とは…」と話されることは、修行僧にとって大変ありがたいことであったと想像します。また、修行僧のみならず、仏教や禅に興味を持たれた方が「このようになりたい…」と、気持ちを新たに作る書物の一つであるといえるでしょう。

『伝光録』は、仏様の教え、即ち「仏法」を「光」に例え、それを伝える記録という意味であり、瑩山禪師はお釈迦さまから代々伝わった仏様の教えを閉ざすことなく、師匠から弟子へ、受け継いでゆくことのありがたさを伝えなかったのではないのでしょうか。

大本山總持寺では、毎年六月『伝光録』に因んで、坐禅修行の集中期間である「伝光会攝心（でんこうえせっしん）」が行われ、修行僧が『伝光録』の勉強をします。

また本年は、瑩山禪師の弟子である總持寺第二代目住職、峨山韶碩（がさんじょうせき）禪師が亡くなられてから六百五十年にあたり、六百五十回大遠忌の法要行事が十月に行われます。この大遠忌の主題は、『相承（そうじょう）』といい、「受け継がれた教えを学び、より良い未来に繋げていく」ということです。

この機会に、横浜の大本山總持寺へお参りしてはいかがでしょうか。

また、北陸新幹線も開通いたしましたので、金沢の大乗寺、そして輪島の總持寺祖院<sup>そいん</sup>  
へお出かけになり、瑩山禪師の御<sup>みこころ</sup>心に触れてみてはいかがでしょうか。

— 終 —